

月例研究会（2012年1月25日）

## 『福本和夫著作集』の刊行と 「福本イズム」の再検討

高橋 彦博

『福本和夫著作集』（全10巻、こぶし書房）が完結し、刊行記念の集いが2011年5月21日、東京・神田の学士会館で開催された。『福本和夫著作集』刊行記念の集いは「福本イズム再検討の集い」となっていた。以下は、この集いに関する報告である。

福本和夫のマルクス主義理解をコミンテルンから排斥された「福本イズム」に封じ込める理解は戦前期における福本和夫評価の通例となっていた。戦後においても、かなりの期間、福本和夫の理論は「福本イズム」として否定的な評価を一面的に受ける立場に追いやられていた。

たとえば、人物辞典を見ると、1958年の『日本近代史辞典』（京大國史研究室編）においては、「福本イズム」は「山川イズム」に代って日本共産党を支配した「えせマルクス主義理論」と規定されていた。ようやく、1990年の『現代日本・朝日人物事典』において福本和夫と「フランクフルト学派」との関係が記述されるに至り、ドイツ留学時代に「フランクフルト学派の前身」にあたる社会主義者集団と「接触」し日本のマルクス主義に「本格的な方法論と体系性を持ち込んだ最初の事例」として福本が評価されるに至っている。

「著作集刊行記念の集い」が開かれた機会に、ライプニッツ大学のProf. Dr. ミヒャエル・ブックミラー氏から日本の福本和夫研究者宛に一通の書簡が届けられた。この「ブックミラー書簡」の内容は、福本和夫と「フランクフルト社会研

究所」の位置関係を確実な形で明らかにし、福本の「西欧マルクス主義」との接触経験を確認する通信となっていた。

ところで、近時、日本の研究者の間に、福本和夫が「フランクフルト社会研究所」の名称提起者であったとする説が広まっていたが、それは不確かな情報であったことがこの「著作集刊行記念の集い」の場において明らかにされた。そもそも福本がドイツに留学した時点で「フランクフルト社会研究所」は設立の準備段階にあり、「フランクフルト学派」は未形成であった。それにもせよ、福本和夫において「フランクフルト学派」を形成する西欧マルクス主義との接触があったことは確かであったことが確認された。

『福本和夫著作集（全10巻）』の完結にあたり、各巻に付された『月報』が「こぶし書房」によって編纂・合冊され、「刊行記念の集い」の参加者に配布されたが、合本された『月報』は、約40名の各氏による今日における福本和夫論の多様な展開の態様を示す「発言記録」となっていた。

清水多吉氏（立正大学名誉教授）における福本和夫の再検討は、福本の理論的営為の初発点となる『社会の構成＝並に変革の過程』（1926年）において「初期マルクス」への言及がなされていることに注目する議論となっていた。具体的には1926年における同書において「ヘーゲル法哲学批判序説」における「自己疎外論」への言及がなされていることが清水氏によって注目されていた。

福本和夫の理論的営為の全体像を「西欧マルクス主義」に立脚する「自主性・人間性の回復」志向において捉え直し、「福本イズム」再検討の起点に位置づける評価が今回の「著作集刊行記念の集い」において承認されるポイントとなっていた。

（たかはし・ひこひろ 法政大学名誉教授）